

【行動とその意味するもの～見守る～】

異食と呼ばれる行動があります。食事以外の場面で、食材以外の物を食べてしまう状態ことですが、ガラスを食べる、クレヨンを食べるなどということになると、これはもう直接命に係わりますから、どんなことをしても制止、制限をしなくてはならないこととなりますが、ちょっと観察してみよう、様子を見てみようというレベルの異食であれば、思わぬ発見に至る時があります。

Aさん、クリスマスを前にして、何やら広告の紙を食べています。飲み込んではいないようなのですが、もともと紙を食べることが多いAさん、この時も支援職員は制止をしようとAさんのそばに行きました。すると食べていた広告紙はユニクロ、何かピンときた職員はそこでその様子を見守ることにしました。新聞紙大の大きな広告用紙が破られ、食べられしながらどんどん小さくなっていきます。そして、最後に残ったのは、なんとジーパンの部分だったのです。職員は尋ねます。「クリスマスプレゼント、ジーパンが良いの？」Aさんは、じっと職員の間を見つめます。「合っていたら握手をしましょう」彼の右手がおもむろに伸びて、職員とYesの握手をしたのでした。

しゃべることができない彼らの伝えようとする全力の姿、それは「見守る」ことによってしか手に入れることができないのかもしれないかもしれません。

「紙、食べちゃいけません！」では彼らの心に手が届かないのです。

Bさん、どの職員も彼の自己選択を支援することは難しいと言います。選択カードをすぐに投げてしまって、何がYesなのかNoなのか、分からないということです。通常であれば、カードを指さすとか、視線を向けるとか、じっと見るとか、障がいの重い方々であってもその方法は多様ではありますが、キャッチ可能です。ところが、カードを投げてしまうという行動は、多くの職員にとっては選びたくない、遊んでいる、選択ということがわからない、という状況だと理解されてしまうのです。

そこで、ある職員が何とかその状況を脱しようと、外出の内容を相談することに挑戦しました。日常的なおつきあいからは選択状況が理解できないというようなレベルの方には感じられないからです。

確かにカードを渡すとすぐにポイっと投げてしまいます。まるで遊んでいるがごときです。ところが10枚ほどのカードが進んだ時、職員はBさんの投げ方には一定の法則があるのではないかと感じ、そんな仮説をもって投げられたカードを見ると、なんと比較的右側に投げられたカードがYesのカード、比較的左側に投げられたカードがNoのカードだったのです。

「カード、投げちゃわからないでしょ！」では彼のやり方をいつまでも感じることができなかったのです。

Cさん、選択カードを準備するとその場から去って行ってしまいます。「カード選択ができないんだ」それが職員の最初の印象でした。さらに無理に選んでもらおうとすれば、なおのことパニックなので、「選ぶのが苦手なんだ」と次には結論づけられてしまいました。したがってCさんの外出の内容は何年も前からマックのハンバーガーになっていました。

ところが、外出の選択内容を決める時に、3枚の選択カードをテーブルの上に置き、職員はその場から遠く離れ「選んでおいてね、教えてよ」と見守っていると、次第にカードに近づいて来て、悩んだ末に、恐る恐る吉野家の牛丼を指さしたのでした。

Cさんは、選択ができないのではなく、選択に対する自信がなかっただけなのでした。

「あなたが選ぶのをいつまでも待っているからね！それを応援するからね！」職員からCさんに励ましの気持ちが届いた瞬間でした。

彼らは、いつでも全力です。今の自分の持っている力でどのようにしたら本当の気持ちが伝わるのか、そればかりを考えているのかもしれないかもしれません。そして、それを受け止めることが、私たち支援職員のミッションなのです。